

## 日本文芸研究ゼミナール(15) : 小説の創作(ゼミナール選抜の手引き : 学習の方法)

著者	浦川 謙一, 笠原 淳
雑誌名	日本文學誌要
巻	56
ページ	119-119
発行年	1997-07-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019980">http://hdl.handle.net/10114/00019980</a>

日本文芸研究ゼミナール(15)  
小説の創作

委員 三年 浦川 謙一

笠原淳教授にご指導いただいている我々のゼミは文芸、主に小説の創作を行うゼミである。初めの授業時に笠原教授より出されたテーマを基に、各人原稿用紙三枚程度の小説を書き、それを授業に持ち寄って批評するという形を取っている。批評はまず笠原教授が全体の印象、感想等を述べ、文章の構成や展開に関する問題点、或いは優れている点を過去の文学作品の例を交えつつ指摘し、続いて学生が一人ひとり自分の意見や感想を述べていく。学生の批評は専門的である必要はなく、時には主観的な感覚批評さえも行われる。批評される側はそれらの意見の中から（たとえば教授の指摘であつて

も）自らに有効であると思われるもののみを受け入れる事が許されている。

作品に関して決められていることはテーマと枚数のみで、ジャンルや形式は全て自由であり、従って特定の参考文献はない。それだけに小説のレベルを上げるためには各人の日頃の努力と創作意欲が必要とされる。また自分にそぐわないと思われる意見に対しても参考として心に止めておく位の柔軟さは必要である。

作品の発表の他に、小冊子の発行も行っている。二年生は一年に一冊、三年生は二、三冊発行している。作品の枚数制限は特になく、普段短編中心の当ゼミでも長編に挑むことができる。またテーマや形式も自由である。小冊子の作成は学生の中から編集委員を決め作成を行う。

当ゼミは設立されてからの年数が浅いため、未だ授業形式などのシステムが確立しておらず、改善の余地が残されている。毎日の授業での作品発表は二年生が中心なので、三年生が何をするかが当面の課題である。とはいえ、それは学生に選択の自由が与えられているということでもある。この自由度の高さこそが当ゼ

ミの長所であると考える。

担当教員 笠原 淳 先生

日本文芸研究ゼミナール(14) 文芸(詩歌・小説・評論など)創作 川村 湊 先生

編注・今回、学生委員未決定による連絡ミスのため、内容の詳細については省略させて頂きます。御了承下さい。

II部・日本文芸作品作家研究ゼミナール(10)d  
——中島敦の文学とその系譜——

委員 三年 岡崎 哲也

「山月記」などで知っている人も多いと思うが、極めて短期間の作家生活と、加えて時代が苛烈な戦争下という悪条件が重なり、戦前の論評は少ない。この中島敦の作品をとりあげ、また夏目漱石や井上靖などの作家の作品とともに比較していく。